

## 柳田國男と小田内通敏

—「郷土研究」をめぐる—

野澤 秀樹<sup>\*1</sup>

### Local Studies in YANAGITA Kunio and ODAUCHI Michitoshi

Hideki NOZAWA

#### ABSTRACT

YANAGITA Kunio is well-known as the founder of Japanese folklore or ethnology, and ODAUCHI Michitoshi is one of the founders of Japanese modern human geography. They cooperated in the local studies group (Kyodokai), and tried to establish their own disciplines. But their local studies are different in the nature. Comparing various local surveys, YANAGITA considered that his research was a means to catch the commonality or generality in the Japanese particular thoughts and religions. On the other hand, ODAUCHI took a substantial approach in order to grasp the speciality or originality of the local areas or regions. While YANAGITA regarded the folklore or ethnology as a science of law or a natural science, ODAUCHI considered the regional geography (study of individuality of regions) to be the core of human geography.

#### 要 旨

柳田國男は、周知のように日本民俗学の創設者であり、日本近代の学問形成に大きな影響力を及ぼしたひとりである。小田内通敏は、日本の近代人文地理学の成立に大きく貢献したひとりである。小田内は、人文地理学の確立をもとめて柳田農政学の門をたいた。かれが師と仰ぐ新渡戸稲造と柳田によって創設された「郷土会」は、「土地と人の結びつき」から郷土、地方の形態・基盤の研究を行っていた。郷土会の活動を通して柳田は民俗学の、そして小田内は人文地理学の確立を目指したのである。柳田はやがて郷土会のあり方に不満を持ち、「郷土研究」をより総合的な学問に位置づけ、その「総論」として民間伝承論・民俗学の確立を目指した。それは郷土(村)の生活を生活の外形、生活の解説、生活の意識などの三つの資料から総合的に捉えようとするものであった。柳田は、各郷土、地方の調査研究から得られえたこれらの結果を比較総合することによって日本の民族に固有の思想と信仰と感情を明らかにすることを最終目標としたのである。郷土研究はそのための「手段」と位置づけられた。したがって柳田においては、郷土の個性を追求することではなく、それらを貫く、一般性、共通性を追求する科学研究が目指されていた。一方小田内は、郷土、地域の特長、個性を追求することをかれの学問—人文地理学の目標においていた。彼らの方法に基づいて行われた研究が、柳田民俗学を結集した日本の山村・海村生活の調査・研究であり、また小田内指導下の文部省郷土教育の総合郷土研究であった。前者では村をひとつの有機体として捉えていない点に、後者では郷土の総合、個性を捉えていない点に問題があった。いずれにしても二人の「郷土研究」の方法の違いはかれらの学問観・科学観の違いによるものであった。

#### はじめに—問題の所在—

柳田國男(1875-1962)についてここで改めて述べる必要もないだろう。日本民俗学の提唱者・大成者として日本の学問に大きな影響を残した人である。一方、

小田内通敏(1875-1954)は、日本の近代人文地理学の成立に大きく寄与した地理学者の一人である。その寄与を柳田の場合と同じように在野からと付け加えることも出来るであろう(飯塚、1955; 岡田、2000)。小田内は、明治32(1899)年東京高等師範学校の地理歴史専修科を終え、早稲田中学校に職を得て教科地

<sup>\*1</sup> 放送大学客員教授(「福岡SC・人文地理学」専攻)

理を担当することになり、地理学へと関心を向けていった。とくに人文地理学の重要性を認識し、そのあり方（課題と方法）を模索していく中で遭遇したのが、新渡戸稲造や柳田國男らの農学・農政学であり、地方研究・郷土研究であった。新渡戸稲造の農学・地方学が小田内の人文地理学形成に与えた影響については、小田内自身も繰り返し語っているし、またそれについていくつもすぐれた研究がなされている（小田内、1932b、1948、；木本、1980、1989；山崎、1984；関戸、1990、1992；岡田、2000）。

他方、小田内にとって柳田國男との関係は、どのようなものであったのだろうか。それについては、これまで新渡戸と柳田が協力して始めた郷土会の活動の中で触れられてきたが、二人の関係については実は必ずしも十分明らかにされているようには思われない。小田内が、柳田の存在を知り、かれに関心を向けるようになったのは、新渡戸の場合と同じように農政学徒としての柳田に対してであったと考えられる。郷土会の結成によって、二人の関係はより親密になり、小田内は明治末期から大正前中期にかけて郷土会の中で中心的に活動し、幹事役の柳田に大いに協力するところがあった。郷土会は、柳田にとっても小田内にとってもかれらの構想する学問形成の場であったとことは間違いない。そこでかれらが共有していた課題が地方研究（郷土研究、以下これを用いる）であったことはいまでもない。ところがそれをめぐって、二人の間で次第に齟齬が生じてくるように思われる。郷土研究に対する二人の理解の違いが明らかになってきたからであろう。

柳田國男、小田内通敏における郷土研究とは何であったかが、本論の主題である。後に詳しく取り上げることになるが、研究史からその問題と思われる点をかいつまんで指摘しておこう。小田内にとっては、郷土研究とは後述するように郷土地理研究のことであり、彼自身の研究においてはとくにその二つの関係が問題になるところはなかったと考えてよいであろう（木本、1980、1989；山崎、1984；岡田、2000）。しかし、柳田は人文地理学がその方法をもって郷土研究と称することに対しては批判的であったのである（柳田、1933、定本④、87；1934、8（6）536、定本⑩、47）。また、方法とは別に小田内の郷土地理も郷土科教育における郷土研究が問題となる場合、郷土地理では納まりきれない問題が生じたのではなかろうか（外池、2004）。

一方、柳田にとって郷土研究は彼の学問形成において複雑な問題を孕んでいたことは、研究史が語るとおりである（宮田、1976、1985；福田、1984；川田、1985；永池、1988；藤井、1995；千葉、1973、1976b、1980、1985；伊藤、2004）。宮田登は、郷土研究を「柳田民俗学の出発点」と位置づけつつ、その郷土研究が本論でも取り上げるように、一般の理解と相違していたこと、その点が「柳田民俗学の性格を知る上で重要な鍵になるだろう」と指摘している（宮田、

1985、109-110）。柳田國男に対して鋭い思想史的研究を行った川田稔は、柳田の本来の意味での「民俗学」が本格的に整えられるのは、ヨーロッパ帰朝後の大正後半期から昭和初期で、「この時期にも柳田は、しばしば自らの研究を〈郷土研究〉とも表現しているが、それはもはや大正前期までの〈郷土研究〉からはその問題関心と方法において一展開を有するものであった」という（川田、1985、250）。この「一展開」を大正前期の「農政学的観点からする農村把握や民間信仰にかかわるものだけでなく農民生活の全体構造の解明」へむかっただとした（同）。そして柳田は、「農村生活のトータルな把握」を目指す学問に「民俗学」の名を与え、昭和の初期にはその体系化を確立した。しかしその後も「郷土研究」の名を使用し続けたのは何故だろうか。

柳田の郷土研究において、郷土会以後、とくにヨーロッパ帰朝後の大正後半期に大きな展開（転回）が見られるとする点で、伊藤純郎も同意見である（伊藤、2004）。伊藤はそれを柳田の郷土観の変化と捉え、詳細な分析を行っている。本稿でも、この時期の重要性を認め、柳田の郷土研究方法論の進化、あるいは明確化の問題として再検討してみたいと考える。1980年代までの柳田研究の集大成ともみられる柳田國男の全生涯を扱った大部な作品、後藤総一郎監修『柳田國男伝』において郷土研究を担当した永池建二は、柳田の郷土研究について、柳田は、「一科の学としての民俗学と総合的な実践の学としての郷土研究とを慎重に区別し、しばしば意識的に使い分けていた。おそらく柳田は、民俗学という整序された学問の枠組みでは捉えきれない何ものかを、〈郷土研究〉という形で抱え込んでいたのである」という（永池、1988、773）。「何ものか」ということが問題になるであろうし、両者がどのような関係であったのか、いまいちど検討が必要であろう。また、多くの論者が指摘するように、また本稿でも問題にするように、柳田は、郷土の割拠性、特殊性を説く一方、その同質性、共通性を強調していた。前者は、郷土研究で郷土人自身の自己認識の方向性を示すのに対して、後者は、郷土の枠を超えた日本を郷土とする日本人の普遍的な精神（エートス）の追究を目指すものであった。柳田は、前者を通して後者に至ることをかれの民俗学の最終目標としたのであった。この二つの関係が柳田の民俗学の展開を支える方法的基底の役割を担ったことは、永池のいうとおりであろう（同、775）。千葉徳爾は、柳田がこの「郷土」のもつ二重性・二面性（しかし生活者にとっては、それは二重性でも、二面性でもないのだが）を、最終的に「民俗誌」の比較総合によって統一を目指していたことを、詳細に方法論的検討を加えている（千葉、1976b）。

近年の柳田の「郷土研究」についての研究は、郷土の実体的研究というよりも「方法としての郷土」に関心が向けられていることも付け加えておかななくてはならない（佐藤、1987、2002a、b）。なお、柳田の郷土

研究で、調査者の問題はきわめて重要な意味をもち、民俗学・人類学研究の課題として議論されているが（関、1996；益田、1997；伊藤、2004など）、本稿ではとくにその問題には触れない。

郷土研究は、柳田にとって郷土会の共通の問題というだけでなく、かれが自らの学問を形成していく上でその方法、枠組みと関係し、また自らの学問が形成された後も、その学問（の方法）そのものに関わる重要問題であった。それに対して小田内は、柳田が民俗学確立後も郷土研究の名称を使うことに批判的であった（小田内、1935）。

他方、上述のように小田内にとっては、郷土研究は人文地理学研究の分野として何の問題もなく受け入れられるものであった。しかし柳田は、地理学の方法そのものを郷土研究と称することに批判的であったことは既に述べた。いずれにしても柳田國男の目指した学問（民間伝承論・民俗学）と小田内通敏の人文地理学は、郷土研究（地方研究、地域研究）において共通の枠組みに属しており、重なり合う部分を持った隣接した分野である。その共通の枠、重なりは、協力する要素であると同時に、葛藤、確執を生む要素ともなる。その根底には郷土研究に対する認識の違いがあった。その確執の要素は、すでに郷土会時代に孕まれていたと思われるが、それが顕著になるのは、柳田が自らの学問（民間伝承論、民俗学）を確立して、郷土研究との位置づけが、明確になってくる大正後期からである。それが顕在化し、違いがより明らかになってくるのは、昭和初期、1930年代文部省が音頭をとって始まるいわゆる「郷土教育運動」においてである。この郷土研究をめぐる二人の差異（対立）は、「郷土研究」に対する考え方と共に、彼らが目指した学問の違い、さらには学問一般に対する観念、つまり学問観・科学観の違いを反映していたと考えられる。

ここで郷土研究の「郷土」という言葉について前もってお断りしておきたいと思う。「郷土」というと生まれ育った土地に対する愛惜、愛郷心といった感傷やイデオロギーを伴い易いものであるが、柳田が郷土研究として用いる「郷土」は、必ずしも生まれた土地とか故郷とかいう感傷を含まぬ区域を指しており、千葉（1976b）は「郷土研究」にかえて「地域研究」を使用している。そのような意味であることを前もってお断りしておきたい。

## I. 郷土会時代の郷土研究

### 1. 小田内通敏の柳田國男との出会い

小田内通敏は、「初めて同氏（柳田國男）を識ったのが『時代ト農政』の好著であった」と述べている（小田内、1935、124）。この本は明治43年12月に刊行されており、後述するようにちょうど新渡戸稲造邸で郷土会が創立される時である。小田内が柳田を知ったのは、少なくともそれ以降ということになるが、これは小田内の記憶違いであろう。というのは、柳田國

男の「年譜」によれば、明治42年の条に「1月7日小田内、宮坂、松本に鳥の話をする。／1月21日・25日 自宅にて小田内、松本、川崎、瀧澤等に地名の話をする。矢田部一家も聴く。／2月3日 小田内等に峠の話をする」とあり（定本、別巻5、628）、これは郷土会以前、柳田が自宅で「郷土研究会」という会を開いていた頃の話だからである<sup>1)</sup>。また、柳田が明治41（1908）年の椎葉村入り（『後狩詞記』の旅）、続く42（1909）年にはじめて遠野を訪れ（『遠野物語』の旅）、山人への関心を深めていたころ、後に『山の人生』（大正15（1926）年、定本④）にまとめられる本に、当時山人についての情報提供者として小田内の名が散見される（定本④、139-140、161、169）。

一方、柳田（1958）は小田内との出会いについて次のように述べている。「小田内君を私に紹介したのは、やはり早稲田の人で、国木田独歩の友人とかきいていて。ことによると牧口君が連れて来たのもかもしれない」という（定本 別巻3、187-8）<sup>2)</sup>。これは上述のことから見て、柳田が明治41、2（1908、9）年ごろ自宅で「郷土研究会」を開いていたことであろう。上の引用文で、「やはり早稲田の人」とある「やはり」は、小田内が早稲田中学に勤務していたからであるが、小田内はそのころすでに柳田の仕事を知っていると想像される。柳田國男は、明治35（1902）年ころより早稲田大学政治経済学科で「農政学」の講義を行っており、早稲田大学出版部より逐次講義録が刊行されていた（柳田、1902～05、定本②③）<sup>3)</sup>。小田内は何かの機会にそれを知ったのではないかと想像される。そのように推測するのは次のようなことからである

新渡戸稲造の『農業本論』がその名の示す通り、農業、農学の原論を扱っており、「土地と人間との関係」をその根本とするところに小田内が地理学の原理を見出したのであった。それに対して柳田の『農政学』（講義録）は、農業政策に力点が置かれ、日本農業の特性や現状が詳しく検討されている。柳田がとりわけ注意しているところの例をひとつあげると、家畜の頭数がその人口に比して、西欧諸国と比べて異常に少ないことがある。わが国の農業では、労働においても、肥料供給の手段としても、副産物の利用方法としても家畜の必要をほとんど認めてこなかった（同、215）。そして柳田は、わが国において畜産が盛んでなかった原因としていくつかの点を上げているが、そのなかで肥料として人糞の施用を指摘している。これは都市農村関係の問題として、のちに小田内が名著『帝都と近郊』においてその問題を実証している。これなどはおそらく柳田の農政学の講義録あるいは直接に柳田から得た知見であろう。

以上少し紹介したように、柳田の農政学の教科書は、新渡戸の『農業本論』とは別の意味で、すなわち原理というよりはより実地的な意味で、小田内の人文地理学の研究においてきわめて有益であったのではなからうか。このような柳田國男の研究内容を知った小田内

が面識のない柳田への紹介を友人に依頼したのではなからうか。こうして小田内は、柳田の「郷土研究会」の一員に迎えられたのであろう。いずれにしても小田内が柳田の面識を得たのは、以上の事実からも『時代ト農政』以前のことであることは間違いない。なお、この書『時代ト農政』は、小田内自身述べているように、農村と都市を関連させてみる視点に立った記述が豊富に見られ、小田内に大きな影響を及ぼしたことは、先の『帝都と近郊』がそれを主題としていることから知ることが出来る。

## 2. 郷土会

明治43(1910)年の末、新渡戸稲造と柳田國男の共通の学問であった農学・農政学をもとに、新渡戸の「地方研究」と柳田の「郷土研究」という日本の地方(農村)がもつ独自性に注目する二人に共通する関心から成立したのがよく知られた「郷土会」である(石黒、1936;芳賀、1972;宮田、1976、1985;岩本、1982;山下、1988;柳田、1958、1971、柳田編、1925;関戸、1990、1992;関、1993)。そしてこの二人を「橋渡し」したのが、新渡戸によれば、小田内であった(小田内、1927)<sup>4)</sup>。郷土会は、会員を中心にした旅や調査の報告をもとに話し合う例会と現地見学や調査を主要な活動としていたが、例会では、農政学的傾向の強い人文地理学的内容の報告が多く行われていたことが知られている(宮田、1976、1985、関戸、1992)。これは新渡戸の「地方の研究」の報告に沿うものであり(新渡戸、1907)、新渡戸がいうように郷土会は「土地と生活との交渉を明らかにしようという目的」(傍点筆者)で話し合う会であった(新渡戸、1927)<sup>5)</sup>。郷土会を形成する際の一つの大きな柱が、新渡戸稲造の主張する「地方の研究」であったことを思い起こしてみれば、郷土会が「郷土を研究する」会であったこと容易に肯かれると思う。そして新渡戸の「地方の研究」は、一村、一郡を調べることから国、世界のことを知ることができるとする考えであり、ムラ(田舎)の歴史や風俗習慣、家屋の建築法(形)と耕地・村落の形態、土地の分割法、方言や里歌童謡などの研究をすることにあった(新渡戸、1907)。

柳田國男は、郷土会で幹事の役を務める傍ら、大正2(1913)年からフォクロリスト高木敏雄と雑誌『郷土研究』を創刊し、本格的な郷土研究を始めることになる(荒井、1988)。柳田は、これまでの農業政策的な仕事についての報告を郷土会で続けると共に、この雑誌の発刊を機会にいよいよいわゆる民俗学的な関心に向かい、「巫女考」、「毛坊主考」などの重要作品を『郷土研究』紙上に連載する。一方、このころの柳田の郷土研究の考えを知る上で重要なのが、やはり『郷土研究』に発表された「郷土誌編纂」に関する柳田の意見表明とその実践であると思われる(柳田、1914a、1918~19;伊藤、2004)。それらの論考は、のち『郷土誌論』(1922)に収められる。それを見る前に、もう一つ雑誌『郷土研究』で注意してよいのは、

高木敏雄が創刊号に載せた巻頭論文「郷土研究の本質」である(高木、1913)。ここで高木は、「日本を以て、日本民族の郷土」(同、4)と考えていること、そして「郷土研究の目的は、日本民族生活のすべての根本的研究であるから、この民族生活の舞台であり、同時にその発展の要件である郷土すなわち土地の研究は、この研究の必須要件である。土地の研究は、土地そのものの研究ではなく、民族の郷土としての土地、民族生活を左右し、且つ左右される土地、換言すれば民族生活に対して相互作用の関係に立つ土地の研究でなければならぬ」(同、10-11)という。これを柳田が承認していたかどうかは分からないが、少なくとも共同編集の雑誌の巻頭論文であり、この雑誌のマニフェストである。この宣言は地理学者小田内通敏を文句無く納得させるものであったであろう。

## 3. 郷土誌編纂

柳田國男は調査・旅行の際に近世以来の地誌類によく目を通していた。明治から大正期にかけて編纂、出版された多くの郷土誌(郡誌、村誌など)類に対しては大いに不満を抱いていた。国の歴史の書き方を、郡や村の郷土誌に適用することへの批判、それはまた歴史研究のあり方そのものへの批判でもあった。国の歴史は政治的な事件、英雄の活躍などといった国の存続にかかわるようなことを、文字で記録された古文書資料を用いて記述されるのが、当時の歴史学であった。それに対して後者、郷土史では、郷土の人びとが日々いかに生活し、今日をつくりあげてきたかが問題であり、そうしたことは文書資料として残されることは稀である(偶然資料)。したがって、郷土史を書くためには別の方法を必要とするのである。そこに柳田は、郷土研究(調査)の必要性を実感していたのである。柳田が後に郷土研究について説明するとき、それが「新しい方法」であることを強調するのはそのことを意味していたのである(柳田、1914a)。

柳田が具体的に郷土誌編纂に関わるようになるのは、信州長野県における郷土誌(史)編纂においてであり、その端緒が、東筑摩郡誌の編纂である(益田、1997;伊藤、2004)。そこには『郷土研究』の寄稿者であり、柳田のよき理解者であった信州松本の胡桃沢勘内が大きな役割を果たしていたことが知られている<sup>6)</sup>(山下紘一郎、1988;伊藤、2004)。胡桃沢の要請に基づいて柳田は、東筑摩郡誌(別篇)のための調査事項、調査方法、とくに後者における調査者の問題などについて詳細な指導を書簡の形で送り届けている(柳田、1917)。

柳田が、胡桃沢宛書簡を通して期待した郡誌編纂のための最重要と考えた調査項目は、1)苗字及屋号、2)小地名の2項目であった。そのほか3)出稼入稼、4)地方商品目録などが付け加えられている。当時実際に調査がされたのは、1)、2)である<sup>7)</sup>。1)の『東筑摩郡家名一覽』が郡誌別篇第一として郷土社から刊行されたのは昭和4(1929)年のことであり、

「地名」の刊行に至っては、昭和51（1976）年のことである（伊藤、2004、21）。これらの調査は、いずれも柳田が目論むだ「研究の中心を郡民（傍点柳田）が〈如何に生活し来たりしか〉という点に置」（定本 別巻4、501）いたものであり、家名も地名も村の起立とその変遷を知る史料の蒐集に関わるものであった。柳田はそれらを「土地と人間との結びつき」を知る資料と位置づけていたのである（柳田、1918～19、定本②⑤、50；柳田、1929、定本①⑤、300、304）。

郷土誌編纂は、郷土研究（調査）に基づいて行われなければならないというのが、柳田の考えである。つまり郷土研究（調査）とは、郷土誌（郡誌）を記述するための資料を採集することである。その資料は、郷土、村の起立、変遷などを知りうる資料であり、柳田は「地名」、「家名」にそれを求める。それらの資料は、郷土と人々のつながりを示すものである。したがって、「地名」や「家名」の由来を知るためには、現地の調査によって、すなわち現地の人（郷土人）をして語らしめなければならない。ここにすでに柳田の郷土研究＝郷土調査の特色が示されている。郷土の資料を郷土において、語彙によって、郷土人によって採集を行うことである。それによって郷土、村を知ることが出来るのである。以上のような資料採集は、郷土研究の重要な作業のひとつ（一段階）であるが、郷土誌を作成する為の基礎的な作業である。その意味で東筑摩郡誌別篇は、郷土誌そのものではなく、まだ資料集である。これを用いて筑摩郡誌を書くことは、後の人びとに託されている。

小田内も郡誌編纂に携わったことがあった。おそらく柳田の薦めがあったのであろう、大正7（1917）年から始められた諏訪史編纂計画では柳田と共に名前を連ねていたが、日の目を見ることは無かった（伊藤、2004）。大正11年には、小田内の故郷である秋田県南秋田郡で郡誌編纂計画が立ち上がり編集協力することになる（関戸、1992）。『南秋田郡誌』は昭和15（1940）年第1集の「自然篇」が刊行されたが、それ以外は刊行されなかったようで、纏った郷土誌とは到底いえないものである。

小田内の郡誌編纂として著名なものは、『南葛飾郡誌』である。柳田の『東筑摩郡誌別篇』は、教員を中心にした土地の人びと（しかるべく調査マンとして養成された人々）による「家名」、「地名」の蒐集であり、郷土誌のための資料採集が郷土（研究）調査と位置づけられていた。小田内の『南葛飾郡誌』（大正12（1923）年刊）は、それぞれの分野の専門家が執筆を担当している。

小田内は本郡を「一は水の豊かな大地の上に描いた人間の業績—堤防・排水・運河・新田と二は接続している大都市の限りない発展が持ち来たす経済上の影響—都市的地域と田園的地域との対立」という二つ注目すべき視点—土地と人々の関係および中心都市との位置関係—から「概観」を考察叙述する。この概観の内

容は大内武次が、農業、工業、交通について詳細に記述し、すぐれた現代地誌となっている。本郡誌は上記のように、各分野の専門家に執筆を依頼しているため、手馴れた作品に仕上がってはいるが、調査・資料蒐集の不足は否めない。また、さきの柳田の東筑摩郡誌別篇では地元の人びとを調査者として育て、資料蒐集を行うことでその土地に郷土研究の機運を高めようとする意図があった。そうした配慮は、この南葛飾郡誌では見られなかったようである。従来の官製の郷土誌（郡・村誌）にはないすぐれた一つの（地理学的な）地誌ではあるが、地元に住む人々にとって、生きてきた生活誌となっているかどうか。また、項目全体が小田内の考える視点を総論としてまとまった一書になっているか、それらの問題が残るように思われる。

#### 4. 郷土会「内郷村調査」

大正7（1918）年の8月15日から10日間にわたって柳田以下10人ほどの会員が、神奈川県久井郡内郷村へ出かけ、村落調査を行った<sup>8)</sup>。郷土会によって行われた内郷村調査は、専門家によるわが国村落調査の嚆矢として知られているが、小田内に限らず柳田にとっても何物にも変えがたい貴重な経験であったであろうことは疑いない。そのことは、二人とも調査後、村の調査についての感想だけでなく、村の調査法についての論考を書いていることから知れる（柳田、1918、1918～1919；小田内、1918b、1926）。

この調査は、小野武夫を中心（そのほか那須皓、小田内通敏が協力）にして作成された詳細な調査項目とそれに基づき分担を決めて調査に臨んだのであるが（小野、1925；関戸、1992など）、予定参加者の都合による不参加、調査前の打ち合わせの不足などから、日数をかけた割には組織的な満足な調査が行われなかったと推測される。結果は、柳田の「非常に面白かったけれども、我々の内郷村行きは学問上先づ失敗でありました」という手厳しい評価が下るのである（柳田、1918～19、定本②⑤、41）。そして調査報告書の出版をめぐることは、それを主張する小田内とそれに強く反対する柳田との間で対立があったとされ、報告書は、結局出版されるに至らなかった（柳田、「大正七年日記」定本 別巻4、297；小田内、1951、5）<sup>9)</sup>。しかもその対立が郷土会が消滅していく遠因にもなったとされる（山下、1988、443）。

柳田は、この調査が失敗に帰した理由として、「問題が多岐に失して順序と統一の無かったこと、学び得ることは何でも学ぼうとした其態度が悪かつたのです」と述べている（柳田、1918～1919、定本②⑤、41）。後者の態度は、それ自体悪いことではなく、場合によっては必要なことも付け加えているが、要するに内郷村の調査は、その目的がはっきりせず、順序と統一を欠いていたということであり、それは、かれがそれより1年半ほど前に郷土会に対して抱いていた不満と同じものであった。柳田は、大正5（1916）年1月の例会後、郷土会について、次のような印象を書き残し

ている。これもよく知られたことであるが、「郷土研究に総論の必要になつて来たこと、ジレットの集合が専門家の代用になりにくいことなど、此会合の為に次第に痛切に感ぜられたのも、亦一個の副産物と見ることができる」と（柳田編、1925、170）。以上の郷土会の「郷土研究に総論が必要になつて来た」ということ、また郷土会上げての「内郷村調査は失敗でありました」という柳田の発言およびそれに対するかれの「順序と統一の無かった」ことという理由は、全く同じことを指している。

那須らはその原因を「社会学的調査目的を設定するまでに至らなかった」からで、「土俗学的調査やら農業経済的研究やら種々の見地が混合して存在」していたからだという（那須・渡辺、1928、258）。郷土（村）を調査するにあたって、その調査、研究が統一ある、纏ったものであるためには、一つの全体、総体と考えられる郷土（村）を成り立たせているもの（その根底）をいかに認識するかにかかっている。那須らは、それを「社会学的なもの」（「社会学的結合」）と認識しており、内郷村調査の頃にはまだそうした認識には至っていなかったというのであろう。郷土（村）を成り立たせている根源は、さまざまな考え方があろう。人文地理学の当時の考え方によれば、「土地と人びとの生活の結合」を考えるであろう。これらは、郷土（村）という一つの全体的、総体的存在を捉えようとするものである。それが可能であるかどうかは問題であるが、果たして柳田は、当時どのように考えているであろうか。後述するように、当時、柳田は、郷土研究を広い、総合的な学問と認識していたことは間違いない。

##### 5. 郷土会時代の郷土研究の概念

柳田（1918～19）は、郷土（村）を調査するにあたっては、切れ切れの知識ではなく「何か纏まったひとつの形を具えるように」することが必要であり、「自分だけは仮に之を『生活の変遷』といっております」と述べている（柳田、1918～19、定本②、42）。郷土の成立のために必要であった条件、そしてこれまでどのような生活をしてきたかという村の沿革、それを踏まえてこれかどう変遷していくか（という村の将来）を考えることであつたという。郷土をその生活として、全体としてみていることは明らかであり、前節で見た東筑摩郡誌別篇への郷土調査と同じように、それを土地と人の結びついた村（郷土）の起立とその生活の変遷に探ることにあると考えられている。村の生活という郷土の全体像を「土地と人との結びつき」として調査、研究することであつた。そのことはこの論文の後半で以上の趣旨に従う郷土の調査・研究に必要なこととして、文書資料に限らず、絵地図類・地名とその口碑・土地に刻まれた痕跡など伝統的な史学の方法とは異なった歴史地理的な所謂郷土資料を取り上げていることに現れている。

なお、柳田は、またこの郷土の調査法に関する論文

で、調査によって村相互に異なることを知ることで、画一的な調査による「全国一様の村是ではすまぬ道理も分かる筈」（同、43）とあって、当時国による村是調査政策を厳しく批判していることに注目される（村是批判については、岩本、1982ほか）。それ（郷土、村の差異）をわれわれの調査目的したらどうか、とさえ述べている。郷土の差異に注目していることに注意しておきたい。郷土会時代の郷土研究の概念をまとめておくとおおよそ次のようになるだろう。

- ・郷土会は新渡戸の「地方の研究」そのものであって、新渡戸がいうようにそこでは、「土地と人間の結びつき」を問題にしていた。
- ・『郷土研究』で高木が述べたように、「郷土研究」とは、日本民族の土地と生活の結びつきを研究することであつた。
- ・柳田が、「郷土誌編纂」や郷土会「内郷村調査」の反省の中で述べた「村の起立と変遷」の研究は、それであると思われる。

これらの考え方は、たしかに「郷土を研究する」ものといってよいが、しかし、郷土生活のすべての面を、この理念によって捉えることはできない。すでに述べたように、人間対人間の関係があるからである。郷土研究は、さまざま面をもっているが、それらをまとめて捉える「総論」を欠いている。那須や川田が述べるように、柳田自身の郷土研究も郷土会時代においては「農業政策的な面」と「民俗学的な面」とが併存していた（川田、1984）。「総論」が必要とされる所以であつた。

郷土会は、内郷村調査のあとしばらくして、新渡戸が国際連盟の次長としてジュネーヴに赴任することになり（大正8年3月）、求心力を失い、自然消滅の形で終息する<sup>10</sup>。また柳田は、貴族院書記官長という重職を辞し（大正8年12月）、自由の身となつてこの年から翌年にかけて、東北から南島まで3回の大旅行を行っている<sup>11</sup>。そして大正10（1921）年5月には、新渡戸の要請によって国際連盟委任統治委員に就任、渡欧し、途中帰国している期間はあるものの関東大震災のために帰国するまで、およそ1年半におよぶ欧米経験（とくにヨーロッパ滞在）は柳田に一つの転機を与えたことは疑いない。上述の川田の「郷土研究」における「一展開」がそれである（川田、1985、250）。

柳田國男は1910（明治43）年に刊行した『時代ト農政』を第二次大戦後再版するにあたって「附記」につきのようなことを書いている。

「第一次大戦後、私は誤解して世の中がすっかり変つて終い、それまでの農政の学問が役に立たなくなるものと考えた。役人をやめることになつて、農政方面の蔵書はすべて帝国農会へ寄附し保存して貰うことにした。

しかしこの想像は早まっていた。間もなく任務を帯びて渡欧し、彼地の農村をあるく機会を得た際に

それに気がついた。けれども最早新規に農政の学を立直す気持ちはなく、この学問は一端途切れてしまった」（柳田1910/1948、定本⑩、160）。

これはよく指摘されるように第一次大戦後1918（大正7）年から渡欧（1921～23、一時帰国を含む）にかけての頃を境に、柳田が、学問の方向を農政学からいわゆる民俗学の方面へ移していく決断をした時期と考えられることである。

他方小田内（1918）は内郷村調査のあと、柳田と同じように村の調査のあり方について似たタイトルの文章を書いているが、ごく簡単に村の調査の注意事項を述べたもので内容的に柳田のそれに比べると見劣りするものである。小田内は内郷村調査に入るところには、かれの代表作の一つである『帝都と近郊』を書き上げており、調査に自信をもって内郷村調査に参加したであろう。かれは衣食住を担当しているが、その問題だけを調査していただけないようである<sup>12)</sup>。調査後の報告書の出版を主張したが、かれ自身の調査報告がどこにも書かれていないのは不思議だ。かれはこのあと韓国・満州などの調査に従事するが、予察的な調査であっても報告書をまとめている（小田内、1923）。

## Ⅱ. 柳田国男の郷土研究の概念と山村・海村調査

### 1. 郷土会以降の柳田国男と郷土研究

郷土会活動の終了・官職辞職・国内大旅行・欧州滞在など身の回りに起こった大きな出来事を経て、柳田の郷土研究に大きな変化の兆しが現れ始める。信州郷土誌史（関係者）との関係は、欧州滞在期間中にも切れることなく続けられ（途中帰国したとき講演）、帰国後の大正14（1925）年に信濃教育会埴科教育部会で行った講演「地方研究ノ目的ト方法」は、柳田の「郷土研究」を考える上で重要な論文である<sup>13)</sup>。その後加筆されて「郷土研究といふこと」と改題され、『青年と学問』に採録される。この論文は、柳田の郷土研究の考え方を明確に示したもので、やがて柳田の学問は、『民間伝承論』（1934）、『郷土生活の研究法』（1935）として体系的に整理されることになる。本章ではこの大正末期から昭和初期にかけて、柳田の学問（「民間伝承論」、「民俗学」）が確立される時期の郷土研究の考え方、方法、特色、それと「民俗学」との関係をまず検討し、ついでその郷土研究の方法で進められた柳田指導の「日本僻地地域の研究」（「山村生活研究」、「海村生活研究」）とその成果をみることにしたい。

### 2. 「郷土研究といふこと」

大正14（1925）年に信濃教育会埴科教育部会で行った講演を元にした論文「郷土研究といふこと」は、柳田が初めて「郷土研究」の名を冠し、郷土研究という言葉の由来、郷土研究の方法等に関してまとめた記述を行ったもので、柳田の郷土研究の考えを知る重

要な論文である（柳田、1928）。ところで柳田は、この論文の冒頭で「郷土研究という語が、何か専門の一つの学科の如く世間から考えられるようになると、私たちは多少の責任を感じる」という文章から始めている（同、定本⑤、214）。郷土研究という語がかれの目指す一専門の学問（当時まだ固有の名前で呼んでいない）のことではなく、それと混同されることに注意を喚起しているのである。たとえ柳田が、かれの目指し、携わる学問そのものを、「郷土研究」の名称で呼んだことはないとしても、当時まで柳田は、自分の目指す学問を郷土研究の名の下でおこなっていたことは先に簡単に触れた研究史からも疑いない。どうしてもよいような問題なのだが、かれが郷土研究ということばを呼び習わしてきたのは事実であり、それがかれの携わる学問（「民間伝承論」、「民俗学」）と違うのであれば、それがどう違うのか、その2つの関係（異同）をはっきりさせることは、柳田が郷土研究をどのように考えていたのか、またそれとかれの携わる学問をどのような関係に位置付けていたのかを解く鍵となろう。その名称に小田内の柳田に対する、また柳田の地理学における郷土研究に対する（名称の）違和感があったのは事実だからである（小田内、1935；柳田、1933、1934）。

まず、柳田は郷土研究という名の由来を、大正2（1913）年高木敏雄と始めた雑誌『郷土研究』の命名に遡って説明している<sup>14)</sup>。その頃、郷土研究という熟字はなく、「郷土という語の感じが、故郷・田舎又は地方などといふ語よりも、別に強い一種の観念を与へるように思われたからして之を採用した」、とにかく「世間に新しい印象を与えるような題号をとということ」で、この語（郷土研究）を（高木が）選択したのだという（柳田、1925/1928、定本⑤、214-215）。このことから郷土研究という言葉には、さほどの意味があったわけではないことが分かる<sup>15)</sup>。それはともかく郷土研究という名称を使うことによって、「世間に新しい印象を与える」としただけではなく、「主たる動機は、何か新しい方法（傍筆筆者）を以て、今後は地方の研究（同）をしなければならぬという心持ちからでていると思う」（同、215）と、柳田は付け加え、「新しい」ということを強調し、当時の意気込みを伝えている<sup>16)</sup>。上の文章に続いて柳田は、「郷土研究と称して、到底我々の承認し得ない方法を以て、地方の前代を研究しようとする人もあるから困るのである」（同）とあって、承認し得ない郷土研究が行われていることを示唆している。それを知るためにはまず柳田の郷土研究の方法とはどのようなものなのかが問題となるであろう。

### 1) 郷土研究の方法

柳田によれば、自分の目指すものは「フオクロア<sup>17)</sup>の如く、資料採集の分野を出来るだけ小さく区画し、個々の地方を単位とした考察方法、及びその沢山の比較を以て、或る事実ある法則を明かにして行こうとす

る学問」であり、「この郷土研究という汎い総称の中に包含させ得ると信じた」といっている（柳田、1925、1928、定本⑤、215-216）。ここで明らかのように、柳田の考える学問の方法は、小さく区画した個々の地方を単位とした資料採集と考察方法並びに比較によって事実、法則を明らかにすることにある。そしてこの方法によって明らかにしようとしている「或る事実ある法則」とは、「民族固有の思想と信仰と感情、此等のものから生れて来る国の歴史の特殊性」のことである。柳田はこの事実、法則を明らかにするために小さい区画の地方を単位として考察、比較の方法をとるのである。後に述べるように、柳田は、郷土を日本の民俗の特性を見いだすための「手段」であったといっている（柳田、1933）。つまりここで採用する方法が、柳田の学問の郷土研究ということであり、手段と同時に「方法」でもあるということである。すなわち郷土研究とは、資料採集を小さく区画した個々の地方を単位とした考察方法である。そしてこの民族の農村生活は、地方ごとに決して単一でないことに注意させ、内郷村調査後の反省論文「村の観方」でも述べていた「所謂画一主義の打破」をこの論文でも繰り返している（柳田1925、1928、定本⑤、216-217）。

しかしこの論文では、その一方、その地方の研究は、各地方の枠で閉じられるのではなく、広く地方研究が全国に開かれ、比較によって「或る事実ある法則」に到達することを目指す必要とされている。すなわち、柳田によれば、小さい区画の地方単位の考察方法だけが郷土研究というだけでなく、地方ごとの成果を比較し、各地方を集めた全体（日本）の共通性、それらを貫く、事実、法則を見出すことを含めて郷土研究と考えていることに注意しておきたい。郷土研究の「比較」によって「差異懸隔」を超えて「共通性」の発見を重視しているのである（同、218）。

以上紹介してきたことからわかるように、後によく知られた論文（1933）で柳田がいうように、「郷土を研究する」のではなく、「郷土で或るものを研究する」ことであったという柳田の学問（「民間伝承論」、「民俗学」）の方法が、ここで明確に打ち出されているのを知る。すなわち「郷土で」の「で」の意味については、「手段」としての「で」あり、そこでは共通性を見いだすためのそれである。ところで「郷土で」には単にそれとは異なった意味を持つ。すなわち「郷土の条件・状況とのかかわり」を示す「で」である。そのことによって郷土はそれぞれ異なった郷土性（＝地域性）が生み出される。それは次の郷土の差異、特殊性、個性→民俗事象の地域性の問題である。

## 2) 共通性と差異

上記の「郷土研究の方法」は、各郷土（地域、土地）の共通性を見いだす手段とするものであった。しかし郷土を手段とするといっても、郷土は、調査のための単なる便宜的な枠に過ぎないのではなく、郷土で民間伝承（民俗）を研究することでもあった。すなわち郷

土がもつ諸条件との関連した民間伝承の研究である。郷土で民間伝承を研究するとは、各郷土の民間伝承を研究することを意味するのであり、そこに郷土研究といわれる理由がある。その成果を総合し、比較することによって、日本の民間伝承、すなわち郷土に共通するところの民間伝承を取り出すわけである。

一方その過程で、各郷土の違い、差異といった各郷土の特色も明瞭になってくるであろう。それを研究の目的とすることも可能である。柳田（1918）は、郷土会時代、比較の重要性を指摘しながらも、その郷土ごとの違い、差異（画一でないこと）を重視していたことを見てきた。柳田においてこの姿勢は変わることはないのだが、上述のように柳田が、自らの学問を科学として位置づけることから、科学成立の要件と考える共通性、普遍性、法則性を強調することになる<sup>18)</sup>（柳田、1934、25）

こうして柳田は、各郷土を独立の研究対象とし、その成果、すなわち郷土の民間伝承（民俗）を研究の最終目的とすることには、強く反対する。つまり柳田の郷土研究は、単一の郷土のみを研究するのではないということである（柳田、1934、86）。「郷土研究は独占割拠の学問ではなく、むしろその反対の事業」であることを強調する（柳田、1929、定本⑤、495）。

柳田において、郷土は法則を見いだすための単なる手段にすぎないともみられようが、その根底には、また郷土会時代の郷土研究の考え方が根強くあるのも事実である。例えば次の言がそれである。「我々が個々の郷土を以て研究の目的物とする場合に、最初に出現して来る問題は、人と天然との久しい間の交渉、それが如何なる変化を生活様式の上に及ぼしていたかということである。それを明白にするのを職分とする学問の、尊重せらるべきは論無きことで、知識の総合という我々の大事業も、結局は其基礎を爰に置くことになるわけである」という（柳田1925、1928、定本⑤、218）。この学問は、「地理学的な学問」と考えてよいと思うが、この学問は総合という視点から、郷土研究の基礎に位置づけられている。「郷土を研究する」ということが、「人と土地の交渉」の研究であり、それが「総合的な郷土研究」の基礎をなすということは明記さるべきである。

この見方は、「郷土で民間伝承（民俗）を研究する」場合にも、郷土を重視する見方に繋がる。このことに再び注意を向けるのは、第二次大戦後の『全国民俗誌叢書』の編纂においてである。柳田自ら叢書第一巻に佐渡島の『北小浦民俗誌』を出版、一郷土の民俗性を描き上げる。しかしここにおいても、この民俗誌が、民俗学の最終目標とは考えられていない。「個々の特色ある地域の記述と、その比較総合は、欠くべからざる準備でありまして、それが現在まで出来ずに居たのです」（柳田、1949、序4）といい、全体（全国）の共通、普遍的な民俗事象を見出すことを目標にしているのである。

### 3) 「郷土研究」が「総合的学問」であるということ ―「民間伝承論・民俗学」と「郷土研究」および 民俗資料分類

この昭和の初年「郷土研究といふこと」以降の郷土研究は、一科の専門の学問を表すのではなく、総合の学であるということであった。そして柳田は、一科の学問に携わってきたというわけである。そうはいいながらも、柳田は、「各局面の有用なる智識を繋ぎ合わせ、又は配合による程度とか順序とか折合とかいうことになる、どこを探しても其専門家という者が無い。折角百科の学は精透の域に達しても、全体の組織総合の学問というものが欠けている」といい、「総合無き学術」を歎くのである（柳田、1927、1928、定本⑤、184）。柳田は、郷土会時代から郷土研究にこの「総合の学問」を期待していたことは疑いない。かつて郷土会の郷土研究に「総論」の必要を感じたのは、それ故であった。上述の「人と天然との久しい間の交渉」は、その総論になり得る可能性のひとつであったであろう。しかしそれは、「総合的な郷土研究」の基礎をなすにとどまるものであった。後述するように、郷土の生活は、その基礎の上にさらに人と人の関係が組織されてきたし、されている。そうした郷土の総体を捉える「総論」でなければならない。それは、郷土会時代の寄せ集め的な仕方では、不可能であった。柳田（1934、2）は、後に民間伝承の採集によって、その智識が人類文化史の全般に及び得るという確信から、民間伝承（民俗学）からする「総合」を考えるようになっていたと考えられる（柳田、1934、2）。

このことは、郷土研究の資料の問題についても指摘できる。史料（文書）を補う無形遺物として、人名・地名・家名などの各種の命名様式を上げているのは、「人と土地との交渉」を辿り得る資料であることは上で見てきたところである。1925年の論文（「郷土研究ということ」）では、さらに季節の行事、生産作業に伴う仕来り、冠婚葬祭の作法、神札の祭日、児童の遊戯、怖畏と不安心、それを散ずる手段、積極的手段と消極的方法などのフオクロアの資料をあげていることである。これこそ柳田が、かれの学問の対象とした「民族固有の思想と信仰と感情」を研究する資料であった。この柳田の学問の対象が整理分類されるのは、『民間伝承論』、『郷土生活の研究法』においてであり、「柳田民俗学」の真髓をなすものとしてよく知られているところである（柳田、1934、1935a）。

柳田が、民間伝承論の学として成立する根拠のひとつとして、民俗資料をあげ、その3分類を提示していることは周知のことに属する。その部分を要約すれば次のようになろう。第1部は生活外形。目の採集、旅人の採集と名づけてよいもの。これを生活技術誌・土俗誌といふことも出来る。これが上記の「人と土地との交渉」を探る資料である。無論それには、第2部の生活解説。耳と目との採集、寄寓者の採集と名づけてもよいもの。言語の知識を通して学び得るもの、とも関係する。そのことは資料としての「地名」を思い起

こせば明らかだろう。この第2部は又土俗誌と民間伝承との「境の市場」であった、という（柳田、1934、⑤、336）。第3部は骨子となるもので、生活意識、心の採集がそれであり、同郷人の採集とも名づくべきものである。僅かな例外を除き外人はもはや之に参与することが出来ず、地方研究の必ず起らねばならない所以、とされる（柳田、1934）。この第3部が骨子といわれるように、柳田民間伝承論・民俗学の中心、核をなすものであり、地方研究（郷土研究）が起らなければならない理由として、生活意識、心の採集は、当該地方人にしかなしえない研究であるゆえとしていることに注意しなければならない。

学問の総合性の問題に戻ると、地理学も民俗学も個別科学とはいえ、個別科学の中で総合的な学問といつてよいであろう。そのことが郷土研究というそれ自体総合的な学問において、盟主との意識を抱かせる結果になったであろうことは想像に難くない。民俗学における総合的な学問の科学としての不可能性についてはすでに議論がなされてきてきたという（福田、1984）。

### 3. 山村・海村生活の調査・研究

柳田國男は、昭和9（1934）年『民間伝承論』、10年『郷土生活の研究法』でこれまで目指してきた学問（いわゆる「柳田民俗学」）の課題と方法を示し、自らの学問を体系化した。それらの理論・方法を実際に日本の郷土（地域）で実践した調査が、昭和9年から始まる「日本僻陬諸村における郷党生活の資料蒐集調査」、具体的には「山村生活調査」（3年間）、引き続き昭和12年から「海村生活調査」（2年間）である（これらの調査に関しては、柳田、1935、1936；大間知、1960；千葉、1976b；宮田、1985；福田、1984a、b；関戸、1994など）。

山村生活調査では日本各県から50の山村を、海村調査では、2年間に短縮されたため30か村が選定された。調査は、柳田の門弟一後に日本民俗学を背負って立つ人々が、「郷土生活研究採集手帖」を持って、村の起こりから、組織、生業、衣食住、協同慣行、冠婚葬祭、年中行事、信仰などの村の生活に関する100項目の事項についてインテンシヴな調査を行った<sup>19)</sup>。その結果は柳田の方法論に従って、各地の調査地村から得られた100項目の成果を比較綜合照合し、山村では65項目、海村では25項目に整理され、日本の山村、海村の民俗として整理まとめられたのである。『山村生活の研究』（柳田編、1937）、『海村生活の研究』（柳田編、1949）がそれである<sup>20)</sup>。

「〈山村調査〉は日本民俗学における調査の型を打ち出すための、一つの最も大きな運動であった」が、様々な問題を孕んだ調査でもあった、という（大間知、1960、7）。柳田は、山村生活の調査に入るに際して、「我々の共同の課題は、村が一個の〈有機体〉として、命長く生きてきた生理を明らかにしようというにあった」と述べて、「有機体」としての村を強調したが、

この「村」は日本全体を「村」として捉えないと理解し得ないであろう（柳田、1935b「採集事業の一劃期」、定本⑤、523）。柳田の方法論においては調査地の村は、日本（全体）の民俗の特性を発見するための総合、比較の手段にすぎないものと考えられ、ひとつひとつの有機体としても村の生理はここでは問題にされていないからである。

『山村生活の研究』は、各調査地（村）から得られた結果を項目ごとに整理されたもので、分類整理された資料集といえるものであり、福田アジオは、それを「重出立証法と周圍論という柳田の方法に対応する資料集積の方法として意図されたのが「山村生活調査」であった」としている<sup>21)</sup>（福田、1984b、7）。

柳田の狙いは最終報告の形であり、それがかれの郷土研究の仕上げであった。この調査で、村そのものをつかむことを無視しているという批判は、調査当時からあった、という。その矛盾から第二次大戦後の『離村生活の研究』では、採集地の村ごとにまとめられたが、村ごとに項目が集められたというにすぎず、それぞれの村が一個の有機体として捉えられているようには見えない。柳田の方法論からして調査地の「村」の独自性それ自体が問題にされることがないのは当然であり、柳田以後、「柳田民俗学」を越える課題として議論されることになる（宮田、1985、128～204；千葉、1962、1964、1966、1976b；福田、1984a）。

### Ⅲ. 小田内通敏と文部省「郷土教育」における総合郷土研究

#### 1. 郷土会以降の小田内通敏

一方小田内通敏は、郷土会時代の成果といってよい『帝都と近郊』（1918）を著わしたあと、朝鮮総督府、満鉄などの囑託として、朝鮮、満州の村落調査を行い、調査マンとしての道を歩み始める。小田内も、かれなりに郷土研究（小田内の場合「郷土地理」にもとづく）の「総論」を求めて努力していくことになるが、それらの成果は、『聚落と地理』（1927）。『郷土地理研究』（1930）。『風土日本の研究基準』（1940）などに収められている。こうした成果をもとに、小田内は文部省囑託として、昭和5（1930）年文部省が師範学校を対象に始める郷土教育（運動）に深く関わることになる。小田内が、再び柳田の郷土研究とめぐり合うことになるのが、この運動においてである。柳田は、この郷土教育とそれを支える郷土研究に対して厳しい批判を行うことになる。

#### 2. 小田内通敏の郷土地理研究

小田内の郷土に対する関心は、地理教育から出発していた（岡田、2000、148）。「地と人との交渉」を研究する学問である人文地理学において、地表の観察は、人文地理学の問題を理解させる最良の方法である。したがって地理教育は、地理を学習するものにとってもっとも身近な存在である郷土の観察から出発すること

になる。そうすることによってはじめて郷土が地理的存在、地域的実在であること、すなわち郷土が、その土地（環境）とそこで生活する人びととの交渉の結果（産物）であることを理解することができる。すでに述べたように郷土としての「地域的実在」は、「地的統一」の理念により理解されるものであり、また小田内は、郷土会以来それを「進化史的方法」によって捉えようとしていた（小田内、1929c）。

こうして小田内は、「郷土を特定の人口集団と親和的な関係にある特定地域」と定義することになる（小田内、1932b、8）。小田内にとってこのように郷土を研究する郷土研究は、郷土地理であり、その両者の関係をあえて問題にする理由（必要）も存在しなかったであろう。小田内にとって郷土は、むら、まちなどの共同生活を営む身の回りの生活圏であったということが出来る。小田内はもともと聚落（村落、都市）の地理的考察に関心があり、聚落の占める土地（環境）とそこで生活するひとびととの関係を課題としていた。このミクロな地域、郷土を認識することが彼の郷土研究（郷土地理）の目的であった。そして郷土の認識が国土の認識に至ると考えるのが、新渡戸の「地方学」の考えであり、小田内もその考えに共感していた。したがって小田内においては、郷土自体が研究の目的とされていたのである。言い換えれば、郷土は国土の、さらには地球の一部であり、郷土（地理）研究は、国家的、国際的でなければならない、つまり国家的、世界的観点からなされなければならない、というのが小田内の主張であった。それが郷土研究の本質であり、国民教育の立場としている（小田内、1929a<sup>22)</sup>。だが、郷土から国土へ、また国土から郷土への双方向的な運動の必要性は認めるとしても、その論理的説明が必要であろう。まず国土的、地球的観点をどのように獲得するのであるか。柳田は、各郷土の調査・研究の成果を総合・比較によってそれを獲得することを目的としている。小田内ではその辺の議論が抜け落ちていように思われる。

小田内は、地理学から郷土研究の総合化を目指し、「総論」として導入を図ったのが、ルプレー＝ゲデスの「地域調査法」であった（小田内、1929b；1930a；小田内、1932c、1932）。とくにゲデスの「ヴァレー・セクション」なる図式であった。河源の山地から平地に流れ出る平野、さらに海に流れ込む河口まで河谷は、その土地環境とそれに適応した生活様式—大雑把に類型的にいえば、森林労働と狩猟生活、牧畜生活、農業生活、漁業といった—を形成している。ゲデスの「場所（土地）—労働—住民」の図式は、決して地理学の独占物ではないが、各種の科学の協力によって研究しうるものである。この方法、考え方が、都市計画・地域計画において将来計画の準備的前提として採用されたが、中心的な実際問題へ焦点を絞れえず、事実の分散的な寄せ集めに終わってしまったという（Dickinson、1976）。この方法は、学校教育、特に地理教育において広く採用されたようであるが、「総論」

となりえたかどうか疑問である。

### 3. 郷土教育運動と総合郷土研究

小田内通敏が村落、都市の聚落地理から専ら郷土地理を論じるようになるのは、昭和初期、とりわけかれが文部省の嘱託（昭和5年）に就任してからである。かれが文部省の嘱託となった経緯は良く分からないが、『帝都と近郊』、朝鮮、満州などの調査研究から、地域調査研究のスペシャリストと認められたからであろう。彼はまた郷土教育を推進する民間組織、「郷土教育連盟」の設立者の一人であったこともよく知られた事実である。こうして小田内は、昭和初期のわが国における郷土教育運動の指導的立場にあった。昭和5年からはじまる文部省の「郷土教育」の促進、そして民間の側（郷土教育連盟）からの「郷土教育」の推進など、いわゆる「郷土教育運動」については、これまでも教育畑から多くの研究があるが（田嶋、1975；三宅、1978；木本、1979、1989；山口、1983；松野、1993）、近年伊藤純郎や外池智によって本格的な研究が行われている（伊藤、1998；外池、2004；それらについて野澤、2007）。

小田内は、この郷土教育を裏付けるものとして、郷土研究の必要性を強く主張していた。それが昭和10（1935）年から始まる「総合的郷土研究に基づく郷土教育」であり、小田内指導の下に行われたその郷土研究の成果が「総合郷土研究」である。その調査研究の成果が印刷されて世に問われたのは、パイロットの位置をしめる山梨県（1936）、彼の故郷である秋田県（1939）、茨城県（1939）、香川県（1939）の4県である。

内容構成は、ほぼ4県とも共通であり、生活環境すなわち自然環境、歴史、人口、聚落、産業、交通、行政、経済、社会、文化、教育などの11項目である<sup>23)</sup>。これは県郡市町村など公官庁が編纂する地誌類に見られる内容構成である。これを見る限りそもそもこの「総合的郷土研究に基づく郷土教育」事業とその「総合郷土研究」とはいったい何であったのかの疑問を抱かせるものである。この事業は郷土教育のために各県の地域的実在の郷土性を明らかにし、郷土の教育、そして郷土の社会改良、さらに日本の将来を築くことを目指したのである。全11部門を総合し、目標に掲げた有機的統一体としての郷土を捉えることが可能であったのであろうか。その成果は、もっとも少ない香川県でもB5判900ページに達し、茨城県にいたっては上・中・下三冊1500ページ近くに達する大作である。師範学校の教員はもちろん、生徒、各村の小学校の教員、各種職員、県民など多くの人々を動員した大規模な事業であったはずである。それぞれの成果については、外池によって詳細に分析されているので、ここではその内容に立ち入ることは避けよう。この事業のタイトルにもある「郷土研究」という本稿の主題から簡単にしておくことにする。

山梨県の報告書では、総論としての県全体の成績が

まとめられ、後半では特殊研究が17テーマ取り上げられている。この形式は山梨県のみである。このような構成をとった理由もはっきりせず、統一を欠く内容の羅列である。また結論も、小田内が担当し、山梨県の郷土性を自然的なもの、社会的なものなどと分けて書き上げている。この調査を郷土の総合的研究の第一次的なそれとしているが、小田内の郷土理念である土地自然とそこで生活する人びとの交渉関係が郷土(性)をつくりあげていくものとするれば、結論の不十分さを禁じえない。

秋田県の結論は、執筆者が明記されていないが、小田内の提唱する総合的地域調査法であるゲデスのヴァレー・セクション図式を適応し、秋田県の郷土性を7地区に分けて結論部分を記載しているが、各論部分の総合がこの地域区分となることの説明がない。

総合郷土調査は、県の郷土性を明らかにすることが目的とされていたようだが、その目的を達成する手順・方法については、どうもはっきりしない。調査項目が立てられ、調査票が作成されていたようではあるが、秋田県では調査票の種類が39枚に達したというが、調査項目作成の問題、それをつかってどのように調査し、整理したのか、調査者とその訓練について問題はなかったかどうか<sup>24)</sup>。柳田の「山村・海村調査」のときの木曜会メンバーによる同質的な調査とはかなり隔たりがあるように見える。既に指摘したように、調査が行われた各県の成果を見る限り、第一次的な調査にしても、まとまりのない結果になっているように思えるのである。茨城県の報告書では「結論」さえないのである。「総合郷土研究」の成果が出る前のことであるが、この文部省系統の「郷土教育」そして「郷土研究」に対して柳田は、厳しい批判を行ったのであったが、その結果を予測していた如くである。その柳田の「郷土教育」批判を見てみよう。

### 4. 柳田國男の郷土教育批判

柳田が文部省系統、すなわち小田内の指導する郷土教育とその背後にある郷土研究を厳しく批判したのが、引用されることの多い「郷土教育と郷土研究」の講演論文である（柳田、1933、定本、④）。この論文は上述のように、柳田が自らの研究史を振りかかって、自分の郷土研究に対する考え方を改めて表明しているので、郷土研究に対する柳田の考えを知る論文として利用、引用されることが多いが、この論文の主眼は、文部省の郷土教育とそれの基盤にある郷土研究に対する批判にある。そしてそれを支える郷土研究が柳田の意図する方法と異なるものであったことが、柳田をしてこの講演をなさしめたのである。この講演はなんと文部省の郷土教育講習会にあわせて行われたものであった（柳田、1933；田嶋、1975；片桐、1975；平山、1981、伊藤、2004）。

批判点の一つは、「現在得られただけの郷土資料が、実際少年少女等の無意識の要求に、ちょうど当て嵌まったものではないようだという点」にある（柳田、

1933、定本④、71)。これまで郷土科の教育では、児童生徒たちの注意力、観察力を養成し、生活の興味を増進すること、さらに郷土愛の鼓吹のためなどとしてきたが、柳田によればそんなことは当然なことであるといひ、郷土研究は、疑問から出発し、得られた知識の分類と比較によって、類似したものや異なったものから、疑問の理解にいたり、あるいは更なる疑問を浮かび上がらせ、それより一歩進めて郷土生活の真実相を発見して彼等に説き聞かせねばならない、というのである。

ところで当時行われていた郷土研究の方法に問題があるとする。すなわち「文部省系統の人々が唱導せられる所謂郷土研究事業には、各自の郷土の事情を明らかにすることを以つて、一旦の目的達成と観る風が見えた」ということにある(同、68、70)。柳田は、この論文でも繰り返しているように、郷土はあくまでも日本全体の特色(柳田においては日本人の生活、日本民族の歴史)を把握するための手段と考えられているに過ぎないのに、文部省、即ち小田内の郷土研究では、各郷土(の事業)それ自体が目的とされていることである。これが教育に持ち込まれる場合、自分の郷土のことしか知らないということになる。柳田によれば、「異なる郷土に居る者にもその成績が役立って始めて国家としてこれを懲慚した意義はあるのである」という(柳田、1931b、定本④、51)。共通性、普遍性なるものを理解してはじめて自分の郷土の特色を知ることができる、それが真の教育であると考えるところにある。柳田の主張に間違いはない。しかし柳田の主張するところはかなり教育が進んだ段階の教育ではないのだろうか。いずれにしてもこの問題は、初等教育の方法上の問題があるように思われる。

### おわりに—まとめ—

柳田國男を中心とした郷土研究(日本民俗学)は、わが国近代の学問においてノンアカデミックな場で形成された特異な学問の例のひとつであろう。まだまだ取り上げるべき問題も多く残されているが、柳田國男を中心とした「郷土研究とは何であったか」を簡単にまとめ、小田内のそれとを比較して結びとしたい。

柳田は、1933年の講演論文で、自分の郷土研究は、郷土を研究することではなく、郷土で日本民族の精神を研究することであった、といった。郷土は研究の対象ではなく、そのための手段であったというのである。一般的に理解されている郷土を研究対象とする郷土研究と郷土で或るものを研究する郷土研究の違いは何か。

一般に郷土研究として理解されている「郷土を研究すること」は、郷土の研究、郷土についての研究と言い換えられうる問題であり、郷土とは何かに答えることであるが、その問いに答えるのは容易ではない。ここで述べてきたことから言えば、郷土とは単なる土地そのものの(自然的土地)ではなく、そこでの生活、

すなわち郷土の生活とは、その土地を紐帯とした生活をさしていた。郷土会の地方の研究は、まさにそれであったということが出来よう。郷土会活動だけでなく、高木敏雄と始めた雑誌『郷土研究』の趣旨もそれであったことを見てきた。このような郷土を研究対象とする学問に人文地理学がある。郷土会にかなりの地理学者が参加していたのはそのためである。後に小田内が依拠することになるヴィダル派の人文地理学の「地的統一」を理念とする地域研究は、それであった。

しかし地的統一の理念だけでは、郷土の人びとの生活を捉えることは出来ない。郷土の人びとの精神生活は、必ずしも土地との結びつきだけでは説明が出来ないであろう。柳田が郷土会活動に「総論」の必要性をいい、郷土会が行った内郷村調査において、統一、まとまりのなさをいったのは、それらを含めた郷土の生活の研究においてであったのである。

第一次世界大戦終結後、柳田の郷土研究は、大きな展開を遂げる。総合的な学問としての郷土研究と個別科学としての柳田の学問(民間伝承論、民俗学)の分離と相互の位置づけが明らかにされる。柳田の郷土研究が、「郷土で或るものを研究する」個別科学あることが明らかにされた。そこでは各郷土は、或るものすなわち日本(民族)の思想、信仰等の共通性、普遍性を見いだすための総合比較の「手段」とみなされたのである。

いまひとつ注意すべきは「郷土で」の「で」の意義である。すなわち各郷土での思想、信仰が、各郷土に状況付けられているということであった。このことはいいかえれば、各郷土の民間伝承、民俗現象は、各郷土のもつ諸条件によって、それらの相互連関によって生み出される郷土の特異性、差異性があるということである。各郷土(地域)の民俗誌がかかれる理由のひとつがそこにある。そしてそれ自体、すなわち民俗誌を書くことを学問の研究目的と考える考え方もありうるのであるが、柳田は各民俗誌も比較総合によって、日本の民俗の普遍性を求める道をとる。

他方小田内の郷土研究は、「郷土を研究する」、すなわち郷土を研究対象(目的)とすることは終始変わらなかった。その郷土を土地と結びついた生活という地理学の課題から郷土の総合性を捉えようとするものであった。ルプレーハウスの「地域調査法」も基本的には変わらない。柳田によれば、これは郷土研究の基礎にあたる部分であった。すなわち柳田の資料分類によれば、ほぼ第一部の生活の形態、外部から観察されるものであった。「土地と人との交渉」として把握されるこの事象について、「労働」を重視する小田内においては必ずしも当てはまらないのだが、柳田は、当時これを地人相関の見方らとして一般的であった環境適応説とみなし、それに対しては批判的であった<sup>25)</sup>

小田内の郷土研究は、郷土教育の裏づけとして重要な意味をもつが、小田内の郷土教育と従来からの教育法である郷土科教育との違いが明確ではなく、郷土

という場を共通にするだけで、各教科の総合、統合の方法については検討がなされているわけではない。そもそもそのことが可能であったかどうかとも問題である。したがって小田内が指導した郷土研究においてもその成果である総合郷土研究は、郷土の有機的統一、個性（郷土性）を見いだすこととはいいながら、結局項目（諸現象）の寄せ集めの感否めないのである。なお、小田内は郷土研究、郷土教育について、ドイツのハイマートクンデに関心を示していたが、ここではその検討は省いた<sup>26)</sup>。

柳田にとって、「郷土研究」は日本民族の思想、信仰などの精神性（エートス）を見いだすための手段、方法であったとすれば、小田内にとっては、各郷土の比較総合を否定するわけではないが、まず各郷土の特性（郷土性）を捉えることを目的としていたといえる。柳田はこれを先の論文（1933）で「方法と順序の違い」と述べていたが、上述したように二人は科学観、学問観を相異していたのである。柳田は、自らの学問を日本に固有の学問でありながら、欧米流の近代科学として仕上げるために独力で努力を傾けてきたのである。

他方、小田内は、欧米の先進地の地理学思想の導入に努力し、日本における人文地理学の確立のために努力を傾けたのである。この時代先進地欧米諸国の人文地理学は、地誌学が本流をなす時代であった。小田内が地域研究の方法において、地域の個性の把握に傾斜していたのはそれ故である。小田内自身は科学の方法論を熱心に追及したわけではないが、柳田が法則定立的な、自然科学的な近代科学の方向をとったのに対して、小田内は個性記述的な人文科学の方法をとったことになる。ここで急いで付け加えておかなければならないのは、このようにいうと柳田がいかにも自然科学のような無機質の科学をやったように誤解されてはならない。小田内がむしろ土地という物質的な面を強調していたのに対して、柳田は、思想、信仰などの精神面を問題にしていたということである。柳田の民俗分類の骨子にあたる第3部「心意現象」の問題がそれである。地理学におけるこの分野の研究は80年代に入ってからのものであった。

この二人の位置関係は、規模こそごく小さいものの、19世紀末から20世紀初頭にかけてのフランスにおいてデュルケーム派社会学とヴィダル派の人文地理学との対立関係を想起させるものがある（フェーヴル、1922；野澤、1988）。いずれにしても柳田國男、小田内通敏とも、明治、大正、昭和を通して疲弊し、貧困に苦しむ日本農村の更正、社会改良に役立つ学問の力を信じて疑わず、学問の確立に生涯をかけた幸福な人たちであった。

## 注

1) 柳田によると、「郷土研究会」は、「明治40（1907）年か明治41（1908）年ごろ私の家で始めたものである」

（定本、別巻3、187）という。上の記事から小田内が柳田の「郷土研究会」に参加するようになったのは、会が始まってすくなくとも1、2年たってからのことであろう。

- 2) 小田内の柳田への紹介者を牧口かもしれないと、柳田はいつているが、これは柳田の記憶違いであろう。同じく柳田「年譜」によると、明治42年5月の条に「馬場孤蝶の紹介で、『人生地理学』の著者でのに創価学会創設者となった牧口常三郎来る」とあるからである（定本別巻3、628）。柳田のところに早く訪れていたのは小田内の方であった。
- 3) 同じころ明治35年から36年にかけて専修大学の「農業政策学」の講義録、また明治40年ごろと推定されている中央大学発行の「農業政策」の講義録が残されている（定本⑧）。
- 4) 柳田によれば、両者を橋渡ししたのは、石黒忠篤である（柳田、定本 3、404）。
- 5) 新渡戸は、このことが小田内の人文地理学の研究に役立ったはずだ、と述べている。その成果が小田内の名著『帝都と近郊』である。小田内自身、新渡戸の影響を回顧している（小田内、1932b、1948、1951など）。
- 6) 胡桃沢が東筑摩郡誌の編纂に招聘されたとき（大正6（1917）年10月（益田、注116、58p））には、すでにその編集方針は固まっており、動かしがたいものになっていた。したがって柳田や胡桃沢の主張は、『別篇』というかたちで受け入れられた。
- 7) 調査には地元教員を中心に多くの地元民が参加して行われた（37か村で300人余りが調査員に委嘱されたという）（胡桃沢、1929、『東筑摩郡家名一覧』「巻末記」、235；山下1988、439）。調査者の問題は、重要である。東筑摩郡誌調査を材料に益田がその問題を主眼的に扱っている（益田、1997）。
- 8) 内郷村調査について、まずこの調査に参加した当事者たちのものには、柳田（1918）の内郷村についての歴史的概要、小田内（1918b）の調査概要の報告と簡略ではあるが、唯一の専門的分担報告とあってよい今和次郎（1922/1954）の民家の報告があるが、意外に少ない。研究文献としては、関、1993；山下、1988；関戸、1992；松本、1992；益田、1997；小川、2002などがある。
- 9) 柳田の「大正七年日記」は厳しいものである（定本別巻④、297）小田内は第二次大戦後この調査を回顧して、文系・理系の異分野の研究者による共同研究の嚆矢であり、その報告書が出版されなかったことを惜んでいる（小田内、1951、5）。
- 10) 昭和2（1927）年新渡戸の帰国と共に、小田内を中心に再興されるが、柳田はこれには参加していない。この会は昭和の郷土研究と郷土教育の運動に結びついてくるがそれはまた別の問題である。第2次郷土会については、（関戸、1992）参照。
- 11) 官職辞職後、朝日新聞社に入社。いわゆる柳田の「三大紀行（『北国紀行』、『秋風帖』、『海南小記』）」の基と成る旅行である。
- 12) ある農家で古文書を発見し皆で見に行ったことを述べている。柳田と同じようなことをやっている印象を受ける（小田内、1927）。
- 13) この講演は小池直太郎によって「地方研究の目的」のタイトルで『信濃教育』（470号、1925）に発表された。この間の経緯については伊藤、2004に詳しい。
- 14) 柳田は、かれの「郷土研究」（その言葉も含めて）を説明する場合に、この雑誌『郷土研究』の創刊から説明するのを常とするが、その説明は、論文が、雑誌

- 『郷土研究』の発刊、中断からかなり時間（年数）を経過してから、それを回顧する形でおこなわれていることに注意する必要がある。
- 15) ただ「郷土」ということばが、新しく興った言葉で、無垢で、手垢に汚れていないというのが、郷土という言葉は、柳田が考えるほど新しく、無垢なものではないことは、島津によって明らかにされている（島津、2005）。
  - 16) この引用でも判るように郷土研究を「地方の研究」とも述べている。柳田は、郷土と地方を同じ意味で使っているのである。もともとこの論文のもとなる講演では、タイトルに「地方研究」を使用していた。
  - 17) この頃、柳田は、西欧のフォクロア、エスノロジー、エスノグラフィ、アンソロポロジーと自分の学問との異同を論じている（柳田（1926a、1934、1935a））。
  - 18) 柳田は、欧州から帰国後の大正末から昭和初期にかけて、自らの学問を体系化に努力する中で、上記のようないわゆる自然科学的な方法論を自らの学問の方法論としているのである。柳田は、滞欧中、当時のヨーロッパの最先端の学問に触れていたといわれる（川田、1984）。その中には、デュルケームの「精神の物理学」の考えもあったであろう。
  - 19) 郷土研究は、とくに第3部の民俗事象の調査においては、郷土人によって行われなくてはならないとするのが、柳田の主張であったのだが、ここに大きな変更がある。調査者の問題はここでは課題として取り上げてこなかった。
  - 20) 戦争で中断後戦後、昭和25（1950）年から離島の調査が行われ、『離島生活の研究』（1966）として出版された。柳田民俗学の集大成的成果であり、『柳田三部作』ともいわれる（柳田國男指導、1966、「再刊にあたって」）。
  - 21) なお、「山村生活調査」では2回、「海村生活調査」では1回の中間報告が出されているが、最終報告の『山村生活の研究』や『海村生活の研究』の類型別資料集と違って、テーマ性に富んだ報告がなされていることに注意している（福田、1984b）。
  - 22) これが小田内における郷土愛・国土愛の問題につながるが、ここではふれない。
  - 23) 「教育」の項は山梨県にはなく、後で付け加えられたようである。また産業、経済は、区別が難しく一緒にしている県もある。
  - 24) 秋田県では県下各学区長を総合郷土調査委員として任命招聘して、県下各小学校に郷土研究基礎調査を委嘱し、その準備として、各郡市に総合郷土調査員打合せ会を開催したという。調査票の種類39枚とある（秋田、1203）。
  - 25) 柳田は、「…所謂環境適応の説の如きも、或るは無益であり又千差万別なる居住地の事情を藐視して、人間生活の展開を学び知る途は有り得ないのである」と述べている（柳田、1931a、「郷土科学に就いて」、定本⑤、462）。
  - 26) 高木敏雄は『郷土研究』の欧文名にドイツ語のハイマートクンデを用いていたが、彼が雑誌を去ると共に欧文名もはずされた。
- 柳田國男研究会編（1988）、445-481、488-493。  
 飯塚浩二 1955：「小田内通敏先生の逝去を悼む」。地理学評論28-3、151-153。  
 石黒忠篤 1936：「新渡戸先生と郷土会」。前田多門・高木八尺編：『新渡戸博士追憶集』。故新渡戸博士記念事業実行委員会、371-378p。  
 伊藤純郎 1998：『郷土教育運動の研究』。思文閣出版、448+22p。  
 伊藤純郎 2004：『柳田國男と信州地方史』。刀水書房、205p。  
 茨城県師範学校・茨城県女子師範学校編 1939：『総合郷土研究上・中・下』。茨城県、410+470+570p。  
 岩本通弥 1990：「柳田國男の「方法」について—綜観・内省・了解—」。国立歴史民俗博物館研究報告27、113-135。  
 岩本由輝 1982：「郷土会と『郷土研究』」。岩本（1982）。255-275。  
 岩本由輝 1982：『柳田國男—民俗学への模索—』。柏書房、289p。  
 大間知篤三 1960：「民俗調査の回顧」。日本民俗学大系13、7-12。  
 岡田俊裕 2000：『日本地理学史論—個人史的研究—』。古今書院、288p。  
 小川直之 2002：「柳田國男と郷土会・内郷村調査」。國學院大學紀要40、47-80。  
 小田内通敏 1918a：『帝都と近郊』。大倉研究所、215p。復刻版 有峰書店、1975。  
 小田内通敏 1918b：「内郷村踏査記」。小田内1927、143-157。  
 小田内通敏 1923：『朝鮮部落調査予察報告』第一冊。朝鮮総督府、82+73p。  
 小田内通敏 1924：『朝鮮部落調査』第一冊。朝鮮総督府、65+33p。  
 小田内通敏 1926：「村を觀る眼」。小田内1927、128-142。  
 小田内通敏 1927：『聚落と地理』。古今書院、211p。  
 小田内通敏 1929a：「郷土研究の本質—国民教育の立場から—」。地理歴史教育、1（1）、7-10。  
 小田内通敏 1929b：「ルプレーの思想と地域研究」。地理教育11、209-218。  
 小田内通敏 1929c：「人文地理学の歩み—生物地理学的考察と思想的根柢—」。人文地理学会編『都市地理学研究』。刀江書院、256-258。  
 小田内通敏 1930a：『郷土地理研究』。刀江書院、325p。  
 小田内通敏 1930b：「郷土科学とその教育」。郷土1、45-50。  
 小田内通敏 1930c：「郷土教育と郷土調査」。郷土2、99-197。  
 小田内通敏 1931：「郷土研究の本質と其の認識—地誌的研究から『谷の断面』へ—」。郷土科学10、7-14。  
 小田内通敏 1932a：『郷土教育運動』。刀江書院、230p。  
 小田内通敏 1932b：『郷土地理』。岩波講座『地理学』。岩波書店、70p。  
 小田内通敏 1932c：「レジオナル・サーヴェイ・ムーヴメント」。郷土教育22、22-30。  
 小田内通敏 1932d：「郷土に関する省察—郷土研究から郷土教育へ—」。郷土教育24、7-12。  
 小田内通敏 1932e：「郷土教育と地域研究」。郷土教育。臨時増刊、120-128。  
 小田内通敏 1935：「柳田國男『郷土生活の研究法』を読む」。教育3、1876-1878。  
 小田内通敏 1938：『風土日本の研究基準』。叢文閣、476

### 参考文献

- 秋田県師範学校・秋田県女子師範学校編 1939：『総合郷土研究』。秋田県、1208p。  
 荒井庸一 1988：「雑誌『郷土研究』」。後藤総一郎監修・

- +14p.
- 小田内通敏 1940:『日本郷土学』. 日本評論社、344p.
- 小田内通敏 1948:「日本人地理学の啓蒙期(二)」。新地理2(7)、15-22.
- 小田内通敏 1951:「人文地理学への歩み—方法論とその実践への結合の提唱」。人文地理、3(3)、1-11.
- 小田内通敏編 1923:『南葛飾郡誌』. 南葛飾郡役所、490p
- 小野武夫 1925:「調査要項の作成心得、村落調査様式」。小野武夫『農村研究講話』. 改造社、1925、25-28、143-162.
- 香川県師範学校・香川県女子師範学校編 1939:『綜合郷土研究』. 香川県、882p.
- 片桐芳雄 1975『柳田國男における郷土研究と郷土教育』. (東京大学教育学部教育史・教育哲学研究室) 研究室紀要2、80-94.
- 川田 稔 1985:『柳田國男の思想史的研究』. 未来社、353p.
- 木本 力 1979:「郷土教育運動の指導者小田内通敏に対する評価について」。教育学説史研究3、1-24.
- 木本 力 1980:「小田内通敏の人文地理学思想の形成過程—郷土教育運動にかかわるまで—」。和光大学人文科学部紀要14、19-33.
- 木本 力 1989:「小田内通敏の郷土地理教育」。『郷土教育』別巻2、名著編纂会、97-158.
- 後藤総一郎 1976:「地方学の形成」。児玉幸多・林英夫・芳賀登編『地方史の思想と視点』. 柏書房、106-118.
- 後藤総一郎監修・柳田國男研究会編 1988『柳田國男伝』. 三一書房、1142p.
- 今 和次郎 1922:「相模津久井郡内郷村」。今和次郎1954:『日本の民家』. 260-277.
- 佐藤健二 1987:『読書空間の近代—方法としての柳田國男』. 弘文堂、323p. とくに第5章、「書物の近代とともに—柳田國男の民俗調査—」。254-281.
- 佐藤健二 2002:「民俗学と郷土の思想」。岩波講座『近代日本の文化史5—編成されるナショナルリズム1920-1930』近代1、51-81.
- 佐藤健二 2002:「郷土」。小松和彦・関一敏編、『新しい民俗学へ—野の学問のためのレッスン26—』. せりか書房、311-321.
- 島津俊之 2005:「明治前期の郷土概念と郷土地理教育」。和歌山地理25、30-63.
- 関 一敏 1993:「しあわせの民俗誌・序説—地方学から内郷村調査まで—」。国立歴史民俗学博物館研究報告51、313-348.
- 関 一敏 1996:「俗信論序説」。族27、30-49.
- 関戸明子 1990:「新渡戸稲造の『地方学』とその村落研究の思想」。奈良女子大学文学部年報34、68-88.
- 関戸明子 1992:「昭和初期までの村落地理研究の系譜—小田内通敏の業績を中心に—」。奈良女子大学地理学研究報告4、167-191.
- 関戸明子 1994:「山村研究の成立過程における動向—山村生活調査(1934~36)と地理学研究—」。西垣晴次先生退官記念:『宗教史・地方史編纂—群馬県を中心とした地方史論』. 刀水書房、1994、795-810.
- 高木敏雄 1913:「郷土研究の本領」。郷土研究1-1、1-12.
- 田嶋 一 1975:「1930年代前半における郷土教育論の諸相—文部省・師範学校系・郷土教育連盟系の郷土教育運動による批判—」。 (東京大学教育学部教育史・教育哲学研究室) 研究室紀要2、57-79.
- 千葉徳爾 1962:「民俗学における地域性の問題」。人類科学14、79-91.
- 千葉徳爾 1963:「地理学と民俗学との接点」。人文地理15、292-305.
- 千葉徳爾 1964:「民俗の地域差と地域性」。東京教育大昭和史会編:『日本歴史論究遺物・遺習資料と歴史研究・考古学・民俗学篇』. 文雅堂銀行研究社、87-103.
- 千葉徳爾 1966:『民族と地域形成』. 風間書房、476p.
- 千葉徳爾 1973:「いわゆる「郷土研究」と民俗学の方法」。愛知大学綜合郷土研究所紀要18、1-14.
- 千葉徳爾 1976b:「地域研究と民俗学—いわゆる『柳田民俗学』を超えるために—」。日本民俗学講座5、朝倉書店、86-150.
- 千葉徳爾 1980:「柳田國男と郷土研究」。我孫子市史研究5、510-532.
- 千葉徳爾 1985:「郷土研究における二、三の問題」。愛知大学綜合郷土研究所紀要30、49-59.
- 外池 智 2004:『昭和初期における郷土教育の施策と実践に関する研究—『綜合郷土研究』編纂の師範学校を事例として—』. NSK出版、514p.
- 永池建二 1988:「〈郷土〉の発見」。後藤総一郎監修『柳田國男伝』、773-778.
- 那須 皓・渡辺庸一郎 1930:「農村社会学序説」。大思想エンサイクロペディア第14巻、神田豊穂編『社会学』B、春秋社、221-256.
- 新渡戸稲造 1898:『農業本論』. 裳華書房、本文454p.。増訂版(六盟館)、1908、682p.
- 新渡戸稲造 1907:「地方の研究」。新民2-2、1-20.『随想録』(丁未出版社蔵版)に収録、269-282.
- 野澤秀樹 1988:『ヴィダル=ド=ラ=ブラーシュ研究』. 地人書房、274p.
- 野澤秀樹 2007:特設レポート「郷土:郷土教育と郷土研究」。人文地理53、259-268.
- 芳賀 登 1972:『地方史の思想』. 日本放送出版会、284p.
- 比嘉春潮 [ほか] 編 1984:『山村海村民俗の研究』. 名著出版、8、111、5、134、3、69、3、71、26p.
- 平山光衛 1981:「郷土と郷土教育」。宇都宮大学教育学部紀要31、33-43.
- フェーヴル、リュシアン 1922: *La Terre et l'évolution humaine: Introduction géographique à l'histoire*. 飯塚浩二・田辺裕訳『大地と人類の進化』上・下. 岩波文庫、上巻1941、下巻1972.
- 福田アジオ 1974:「柳田國男の方法と地方史研究」。地方史研究24、9-19.
- 福田アジオ 1984a:『日本民俗学方法序説—柳田國男と民俗学』. 316+73p.
- 福田アジオ 1984b:「解説—「山村調査」と「海村調査」—」。比嘉春潮 [ほか] 編1984、1-26.
- 藤井隆至 1995:『柳田國男 経世済民の学』. 名古屋大学出版会、14+435+6p.
- 益田岳 1997:「はじまりのフィールドワーカー柳田國男と内郷村/東筑摩調査—」。筑波大学人文学類文化人類学の卒業論文。(www.chiiki.tsukuba.ac.jp/Members/masda/dp/Hajimari\_no\_Fieldwork\_GT97-099pdf/file\_view\_lbk)
- 松野 修 1993:「郷土教育連盟の理念とその挫折—雑誌『郷土』『郷土科学』『郷土教育』の分析を中心に—」。名古屋大学教育学部紀要(教育学科)40、79-91.
- 松本三喜夫 1992:「内郷村への旅」。『柳田國男と民俗の旅』. 吉川弘文館、37-92.
- 宮田 登 1976:「郷土会と郷土教育」。児玉幸多・林英夫・芳賀登編『地方史の思想と視点』. 柏書房、119-128.
- 宮田1985、第三章「日本民俗学と郷土研究」.

- 宮田 登 1985：『新版 日本の民俗学』。講談社学術文庫、250p。
- 三宅達也 1978：「わが国における郷土教育の系譜に関する研究—郷土教育連盟による活動を中心に—」。新地理26-4、45-68。
- 柳田國男 1902～05：『農政学』早稲田大学政治経済科講義録。早稲田大学出版部。定本㉘、187-285。
- 柳田國男 1902～03：『農業政策学』専修大学講義録。定本㉘、287-421。
- 柳田國男 1907？：『農業政策』中央大学講義録。定本㉘、423-493。
- 柳田國男 1910/1948：『時代ト農政』。聚精堂、後（昭和23（1948）年）に、附記と索引をつけて実業之日本社より刊行。定本㉙、1-160。
- 柳田國男 1914a：「郷土誌編纂者の用意」。郷土研究2-7。柳田（1922）、定本㉚、5-13。
- 柳田國男 1914b：「郷土の年代記と英雄」。郷土研究2-8。定本㉚、14-20。
- 柳田國男 1917：「大正6（1917）年10月11日および同月17日付け胡桃沢勘内宛柳田書簡」。定本 別巻4、500-506。
- 柳田國男 1918：「相州内郷村の話」。三越8-9附録。柳田1922所収。定本㉚、33-40。
- 柳田國男 1918～19：「村を觀んとする人の為に」。都市と農村4-11、12；5-1、2。柳田1922に所収。定本㉚、41-67。
- 柳田國男 1922：『郷土誌論』。郷土研究社、144p。定本㉚、1-81。
- 柳田國男 1925：「地方研究の目的」。埴科郡教育部会講演。信濃教育470、1-10。柳田1928に加筆され「郷土研究ということ」と改題されて所収。定本㉚、214-231。
- 柳田國男 1926：「Ethnologyとは何か」。文話会講演。定本㉚、232-247。
- 柳田國男 1926：「日本の民俗学」。日本社会学会講演。定本㉚、248-259。
- 柳田國男 1927：「地方学の新方法」。社会教育指導者講習会講演。柳田1928所収。定本㉚、182-196。
- 柳田國男 1928：『青年と学問』。日本青年館。定本㉚、83-259。
- 柳田國男 1929a：『東筑摩郡家名一覧』。序。定本㉛。「家名小考」。291-307。
- 柳田國男 1929b：「東北と郷土研究」。仙台放送局より放送。定本㉚、483-497。
- 柳田國男 1931a：「郷土科学に就いて」。『郷土科学講座』第一冊5-14、四海書房。定本㉚、457-463。
- 柳田國男 1931b：「郷土研究の将来」。『郷土科学講座』第一冊、15-34、四海書房。柳田1944に所収。定本㉚、49-65、㉚、464-481。
- 柳田國男 1933：「郷土研究と郷土教育」。郷土教育27。柳田1944に所収。定本㉚、66-94。
- 柳田國男 1934：『民間伝承論』。共立社書店、243p。1980：伝統と現代社、243+3p。「序」のみ定本㉚、331-337。
- 柳田國男 1935a：『郷土生活の研究法』。刀江書院、3+33p。定本㉚、261-328p。
- 柳田國男 1935b：「採集事業の一劃期」。『山村生活調査第一回報告書』。定本㉚、523-531。
- 柳田國男 1936：「緒言」。『山村生活調査第二回報告書』。比嘉春潮 [ほか] 編1984：同。1-5。
- 柳田國男 1944：『国史と民俗学』。民俗選書7、六人社。定本㉚、1-125。
- 柳田國男 1946：「現代科学といふこと」。『民俗学新講』。明世堂書店。定本㉛、3-16。
- 柳田國男 1949：『北小浦民俗誌』。三省堂。定本㉚、359-454。
- 柳田國男 1958：「郷土会と牧口常三郎」。『故郷七十年』。神戸新聞社。定本 別巻3、187-188。
- 柳田國男編 1925：『郷土会記録』。大岡山書店、264p。
- 柳田國男編 1938：『山村生活の研究』。郷土生活研究所、593p。
- 柳田國男編 1947：『海村生活の研究』。日本民俗学会版、472p。
- 柳田國男指導・日本民俗学会編 1966：『離島生活の研究』。日本民俗学研究所、959+76p。
- 山口 満 1983：「小田内通敏と郷土教育運動」。藤原良毅教授退官記念会編、『地域社会と教育』。無明舎出版、53-71。
- 山崎準二 1983：「小田内通敏の経歴と著作・関係文献目録—文献調査及び聞き取り調査結果の第一次整理—」。静岡大学教育学部研究報告 人文・社会科学篇34、125-141。
- 山崎準二 1984：「小田内通敏の人文地理学と郷土教育論」。教育方法史研究2、78-99。
- 山下紘一郎 1988：「郷土会とその人びと」。柳田國男研究会編（1988）、395-444、481-488。
- 山梨県師範学校・山梨県女子師範学校編 1936：『綜合郷土研究』。山梨県、1127p。
- Dickinson, R. E. 1976: Patrick Geddes 1854-1932. In: *Regional Concept - The Anglo-American Leaders*. Routledge & Keagan Paul, 27-34.

(2008年10月30日受理)